



1 富限城跡の位置と地理的環境

霧島市隼人町は、鹿児島県本土のほぼ中央、鹿児島湾の最奥部に位置している。町北部は、霧島山系から延びる台地が入りくんだ複雑な地形をなす。この台地を樹枝状に浸食しながら、嘉例川、霧島川、西光寺川が流れ、町内をほぼ南北に流れる天降川に合流している。天降川は、町南部の下流で沖積平野を形成し、鹿児島湾に注いでいる。

本調査区の地形・地質は、標高 250m の所謂「シラス台地」とは異なり、標高 20m 以下の「沖積平野」における台地である。真孝原あるいは大野原台地と呼ばれる。従来、「本地区の構成地層は、天降川の形成した沖積層ではなく、小円礫と砂層の互層で、砂層は偽層を呈し、三角州または浅海成堆積層を示している。従って、遺跡の基盤は、第四紀更新世の扇状地・段丘堆積層からなっている」と考えられていた。しかしながら、近年の研究によると、完新世の相対的高海水準時に形成され、隆起したものであるらしい(森脇 他 1986)。城跡の立地する台地及び周辺の標高 10~15m の台地は隼人面と呼ばれている(森脇 他 1986)。完新世の相対的高海水準時に形成され、隆起したものであるらしい。北側の標高 32m の小丘については、流紋岩によって形成されていることから、浸食に取り残された残丘と考えられている(成尾 1999)。

富限城跡は霧島市隼人町龍波見 1881 番地外に所在する。国道 10 号線と国道 223 号線の交差点の北東、NHK のラジオ塔が設置されている場所が富限城の本丸に相当する部分である。東約 700m には寛文 6 年に川筋直しを受けた天降川(新川)があり、また、南の国道 10 号線は旧海汀線にあたる。

2 富限城の概要

文禄 4 (1595) 年に、第 16 代の島津義久が修築し(三国名勝図会)、鹿児島内城からここに移ったといわれている。慶長 9 (1604) 年、国分市の舞鶴城に移るまでのあしかけ 10 年間、ここに居城していた。義久の在城中には、1597 年の慶長の役や庄内の乱(1599 年)、関ヶ原の戦い(1600 年)など全国的にも大きな出来事があった。

標高約 32m の小さい丘と周囲の標高約 12m の平らな場所からなり、東西約 150m、南北約 250m の長方形を呈する。南を除く三方に堀が巡り、館側の周囲を石垣が取り巻く。周辺の道路の大半は T 字状を呈しており、計画に基づいた町割りが窺われる。T 字の突き当りには石敢當が残る。国道 223 号線を挟んで西側に富限小学校があり、周辺には、犬追馬場、御厩など城に関係するような小字名が残っている。また、城内の東側に島津氏縁の稲荷神社がある。富限城跡は、平成 6 年に隼人町の史跡に指定され、これまで、町教育委員会によって 5 回の発掘調査が行われている。

「富限」という地名の初見は、『旧記雑録前編』の天福 2 (1234) 年にみられる(源篤家田地売券)が、現在の富限城跡についてのことなのか定かではない。また、1602 年には「富限湊」に唐船が入ったり、義久の琉球渡海朱印状が出されており、浜之市港との関りも注意すべきである。

3 調査の概要

【第 1 次調査】

平成 3 年度に擁壁工事の事前調査として北東の一角を調査した(A 地点)。初めて発掘調査されたことによって次のようなことが判明した。

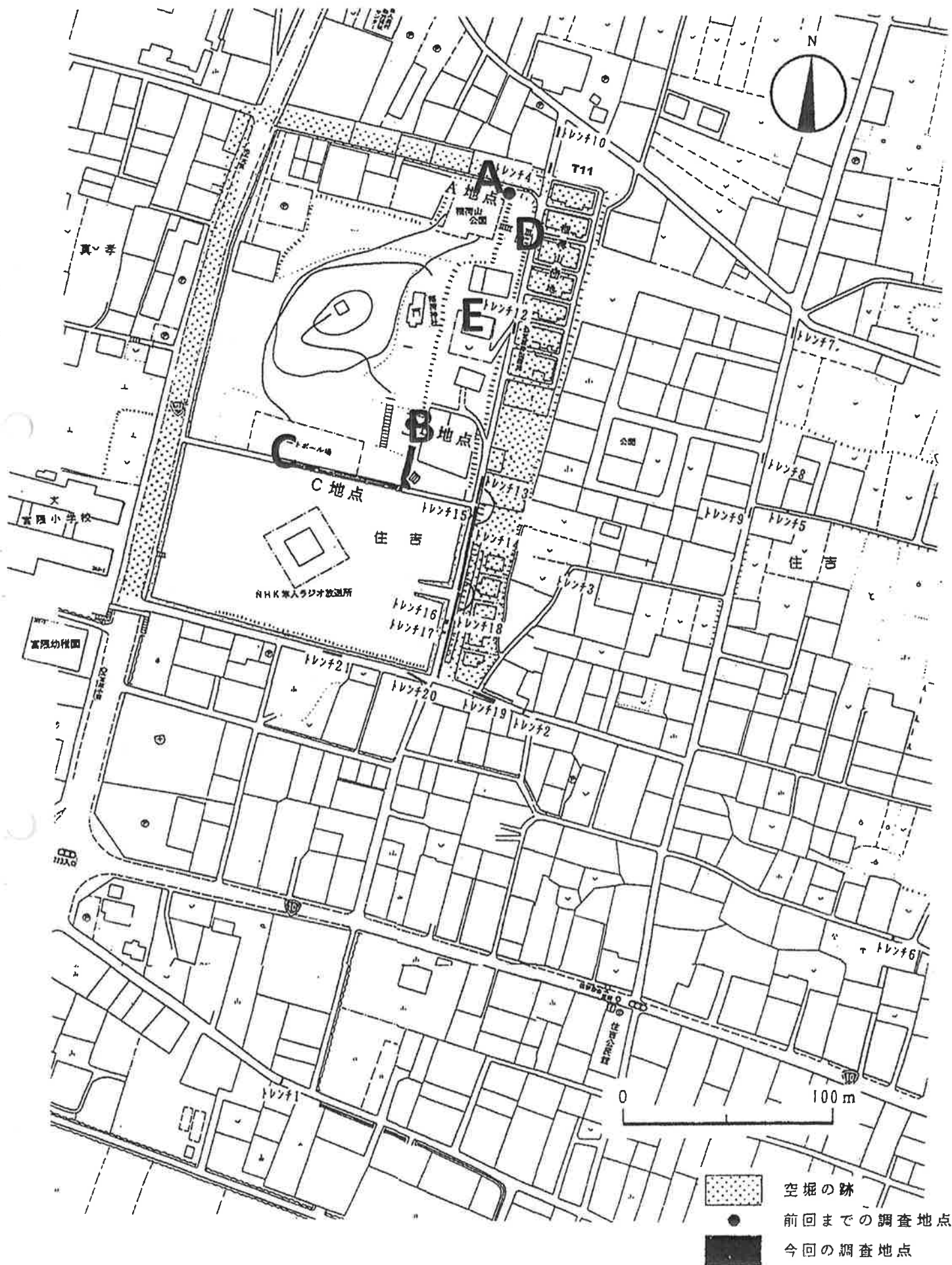
- ①「裏込石」が大量に見つかった。礫の大きさは、50cm のものから 30、10cm 前後。
- ②堀の底は、現況道路よりも 1.7m 下。
- ③堀の基底部には、現位置を保った外石と思われる大形礫がある。
- ④自然の独立台地の上に城は築かれていた。

【第 2 次調査】

平成 5 年度に、町福祉課による公衆トイレ建設や建築課による整備のため、公園内の一角を調査した(B・C 地点)。C 地点は側溝工事に伴うものである。この調査では、狭い面積にも関わらず、溝や土坑、1,000 点を越す遺物などが出土。瓦約 400 点、16 世紀頃の中国製陶磁器など約 150 点、古銭(洪武通宝など)4 点、下水用の石製 U 字形の溝などがみついている。

- ①文献上では、門は茅葺であるとされているが、大量の瓦の出土から瓦葺の施設もあったことが考えられる。
- ②C 地点の調査から、少なくとも 3 期の遺構があることが考えられる。
- ③B 地点で出土した石製の U 字溝は、片側にホヅ状のでっぱりがあり、城内には組合せ式の下水施設があったことが考えられる。

図3 第3次富隈城跡発掘調査トレンチ配置図



④矢穴痕が残る自然礫が多数見つかり、この場所で石垣は調達されたことが判明した。

⑤軒丸瓦の文様は、連珠文と三つ巴文で、鹿児島城(鶴丸城)につながるものがある

【第3次調査】

下水道工事に伴って、城周辺に幅1mのトレンチを23ヶ所に入れ調査した。その結果、

①東側100mの道路部分では、ほとんど遺構は検出されなかった。家臣団の施設は、現在の宅地内に存在するものと思われる。

②堀の石垣は本丸側のみで、外縁部には築かれていなかった。

③堀は水堀ではなく、空堀であった。堀底には道路状遺構が検出され、砂や泥の堆積した痕跡がなかった(トレンチ12)。

④大手門前では堀が屈曲しており、外枅形虎口の存在が予想される(トレンチ13)。

⑤大手門前の石垣の高さは約4mで、石を割った時の矢穴跡や調整痕(ハツリ)が残っており、石の形を整えたことがわかる。

⑥大手門付近の石垣の下基礎部分は、小礫を混入した褐色土で、約10cmの厚さであった。それほど強く締めずに、その上に流紋岩の石を積んでいる。

【第4次調査】

平成13年6月に北東の一角が雨で崩落したため、町都市計画課による石垣の修復工事に伴って調査された(D地点)。高さ約3m、長さ約35mの範囲を調査した。遺物が少量出土している。

①石垣の上部は石が消失しており、抜き取りされていた。

②石垣のない上部に大正3年火山灰が検出されたので、明治時代には石垣が抜き取りされていたことが判明。

③一つの石を割ったネガとポジの隣り合わせの礫がある(No.27・31)。

④石垣の控えがほとんどなく、礫のサイズから前面の長径の3分の2ほどの長さであった。

【第5次調査】

平成19年、城内の東の一角で宅地造成計画が明らかになり、市教育委員会隼人出張所と因者で協議を行った。その際、町内に市有地の代替地があれば、現存建物3棟を含め、立ち退く意志があり、その後に史跡公園として利用して頂ければとの提案が示された。そこで、市教育委員会隼人出張所は市開発公社・都市計画課等と協議し、代替地の確保を図ったが、見出すことができず、移転は断念した。そのため、原因者は、予定どおり宅地造成・分譲への道を模索することになった。その結果、削平される予定の部分を中心に確認調査を行うこととなった。現地調査を平成19年9月18日から10日間の予定で実施した。調査範囲は11m×25mで、畑地となっていた。そこに2×5mのトレンチ2ヶ所と1×4mを1ヶ所設定し調査した。遺物が少量と加工した大型礫が出土している。

4 まとめ

これまでの5次にわたる調査から次のようなことが考えられる。ここでは第4次調査結果を主体に述べる。

(1) 矢穴痕

石垣に使用された大きな礫には、石を割る際の矢穴痕が多数あり、礫を割った割面石が主体である。同じ石であるネガ・ポジの関係をもつと思われる事例がいくつか報告されていることから、ここでも詳細に礫表面の形状を検討した結果、No.27・31が同一の石であることが窺われた。拓本等からの照合であり、接合していないので断定はできない。第4次調査では矢穴痕は48点中21点にみとめられ、大半は小さめの矢穴であった。1辺のみならず2辺に認められるものもあり、割りにくい石であったことが窺われる。石材は流紋岩を主体とする。矢穴の径は、表面側幅3.5~4.0cm、奥行きは3.0~3.5cmで、その形状は三角形のものや長方形のものがみられた。数は少ないが、大きめのものもあり、表面側幅7.0cm、奥行きの深さは6.5cmの三角形のものがみられた。また、割った後の礫表面の微調整である「はつり」もみられ、手をかなり加えていることが看取できる。割面石以外の自然礫は、48点中7点で、南側は2点と少なく、その割合は北側調査区に集中していた。

矢穴の大きいものの方が古いと一般的にはいわれている。文禄元年築城とされる佐賀県名護屋城跡では、幅11cm、深さ7cmの矢穴が主体であり(高瀬1998)、小西行長が築いた熊本県宇土城では幅

9 cm, 深さは5～6 cmのものがみられた。このように, 富隈城と築城時期が近い城では大きいものが主体である。富隈城の幅4 cm, 深さ3 cmの小さい矢穴が地域性を示すのか, 石材等による制約などの技術的なものに起因しているのかは不明である。大きな時間差を示すものではないと思われるので, 今後, 検討する必要がある。

(2) 石垣抜き取り時期

大型礫のない部分に大正3年火山灰が約10 cmの厚さで水平堆積しており, 降灰以前の礫抜き取り行為があったことが判明した。その周辺から「尋五女 池田」という銘のある硯が出土しており, ある一時期, 上部は石垣がなく, 土に覆われていない空間があり, 子供たちが容易によじ上ることができるようであったことが窺われる。石垣を抜き取った部分にも多量の小礫が残存しており, 周辺にあった裏込め石で大正3年以後も崖(石垣のない部分)の補強がなされたものと思われる。

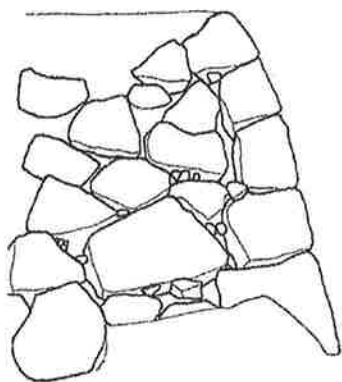
(3) 石垣の礫石規模

大型礫48点のうち, 平均の径は, 長径が判明した46点では59.1 cm, 短径が43点で46.3 cmであった。大型礫は前面の築石側の径に比し, 奥の控えが短いものが大半で, 奥行きの判明した24点でみると, 平均で37.7 cmであった。すなわち $59.1 \times 46.3 \times 37.7$ cmという大きさの礫石が平均値である。

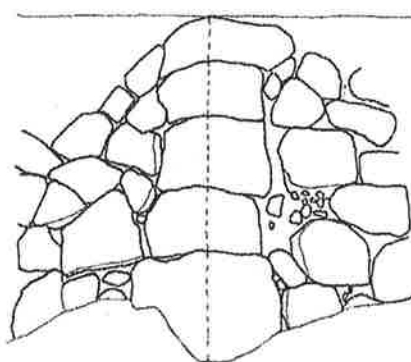
石工の間では, 間知石についての言葉に「インニ」, 「インゴ」, 「インパチ」という言い方があり, 横のサイズが1尺2寸(約36 cm), 1尺5寸(約45 cm), 1尺8寸(約55 cm)の3種類があったという。その横の長さに比し高さは低く, 8割程度の大きさとなるらしい。また, 構造的に堅緻であるためには, 横とほぼ同じ長さの奥行きが必要であるとのことであった(元石工の松元義治氏御教示)。富隈城の石垣の控えは, 長径の長さの6割近くにすぎない。このことからみて, 前面の平らな面積を早めに確保するという意識が働いていたかも知れない。かなり無理な構築であり, 裏込めの栗石でよほどしっかりと固定しないと崩れる可能性があるだろう。栗石を多用しながら, 短期間で作り上げたことが窺われる。富隈城跡は間知積みではないので一概には同一視できないが, 結果として, 崩落しやすい状況を生み出したのかも知れない。名護屋城では縦(高さ)寸法と「控」がほぼ同じ寸法比率か若干「控」が長い石材が使用されている(宮武 1996)。

(4) 石垣構築構造

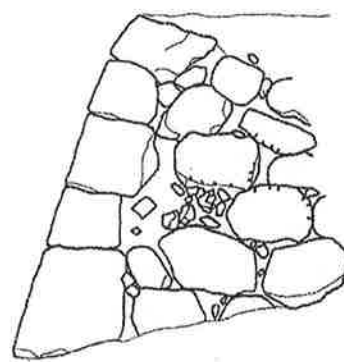
南側調査区の断面を観察すると, 砂層の地山が段状を呈していた。調査できない奥の部分はをさらにピンポールによる調査を行ったところ, 全体で幅約70 cmの平場が造られていたことが窺われた。先ず, 地山を何段かの平場を作り, 外側の石垣を置き,



左側立面図(B面)



展開見取り図(A面)



右側立面図(C面)

図26 石垣隅角部(大手門)

栗石で補強しながら、内側には土砂を詰め込んで構築したのであろう。

前述したように、控えがほとんどない礫石を使用しており、礫の平坦面を早めに確保するという意識が働いている。しかし、構築期間が半年程度にも係わらず、礫表面の「はつり」が多数みられる。このことは、緊急性というよりも、裏込め石の有効活用という当時の技術的な問題の可能性もある。このことは、「はつり」が石垣を積む前の石を割った時に同時になされたものなのか、あるいは石垣構築後、建物を建設中等に並行してなされた調整なのかでも異なってくる。石垣隅角部の稜線造作は直線性を示すためにも、石積み構築後の作業の方が合理的である(松元氏御教示)。「はつり」作業も、他の普請作業と並行して取りかかることが効率的である。今後、検討する必要があるだろう。

(5) 築城期間

文禄4(1595)年6月29日、豊臣秀吉による所替の指示後、義久は7月20日に鹿児島内城を出る決意をし(旧記雑録後編2-1569)、年内には富隈に移ったとみられる(三木靖先生御教示)。堀は、幅約20m、深さ約6mもあり、また、本丸部分の長方形の区画は、東西150m、南北250mで、周囲に石垣がめぐる。その石垣の表面には加工痕が無数にあり、手がかかっている。およそ5ヶ月の期間で、堀の掘削・石垣の築造・屋形の建築など普請の全てをこなしたことになる。当時、義久・義弘・家久三殿時代の鼎立状況を考えると、恐るべき動員力である。

5 今後の課題

義久居城中に、豊臣秀吉によって坊津に左遷されていた関白近衛信輔が、罪を許されて帰京の途中、富隈を訪れている。その時、茅葺きの門をみた信輔の家臣が「みすぼらしいので瓦葺きにしたら」と言うと、義久は「自分は庶民の富強を願うのみである」と語ったというエピソード(薩隅日地理纂考)が残っているが、多数の瓦の出土は、屋根構造にもいろいろあったことを物語っている。今後は城内部の施設等を明らかにする必要がある。

城郭のもつ構造として、最も重要なものは縄張りであろう。それは立地とも深い関わりをもつ。地理的要衝としての富隈の地が選ばれた所以である。その他の属性としては、普請としての土塁、石垣、堀、城門、塀、橋、櫓がある。また、城内の殿舎、武器蔵、食糧蔵、城主の居館、政庁などの建物、庭園と茶室、井戸、かわやなどの構造物が存在する。今後は、これらがどのような場所にあるのかをさらに調査検討する必要がある。

また、次のような視点からも検討を加えていく必要があるだろう。

- (1) 義久が「修築」したという記録(三国名勝図会)があり、修築以前の建物がどのようなものだったのか、あるいはいつ頃のものか。
- (2) 城郭内の建物配置、二の丸、三の丸、城下町との関係など陽陰師江夏友賢の城づくり。
- (3) 義久が舞鶴城に移った慶長9(1604)年以降も使用されていたのか
- (4) 浜之市港の役割。
- (5) 城下町の構造

舞鶴城に移った時期については、慶長7年、9年、10年の三説があるという(栗林 1997)。その後の富隈城がどのように維持されたのかも検討課題である。

参考文献

- 始良町教育委員会 1994 『始良町中世城館跡』始良町文化財報告書(1)
上屋久町郷土誌編集委員会 1984 『上屋久町郷土誌』上屋久町
木島孝之 1995 「鹿児島城の縄張り構造と島津氏権力との相関」『中世城郭研究』第9号
中世城郭研究会
栗野町郷土誌再版委員会 1995 『栗野町郷土誌』栗野町
栗林 文夫 1997 「第V章 文献史料からみた舞鶴城」『本御内遺跡Ⅲ』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(21)
高瀬哲郎 1998 「『石を積む』ということなど」『研究紀要』第4集 佐賀県立名護屋城博物館
隼人町教育委員会 1999 『富隈城跡Ⅱ』
隼人町教育委員会 1999 『富隈城跡Ⅲ』
隼人町立歴史民俗資料館 1993 「富隈城跡」『年報—平成4年度版—』第3号
宮武正登 1996 「肥前名護屋城の石垣について」『織豊城郭』第3号 織豊期城郭研究会
重久淳一 1994 「富隈城跡の調査」『鹿児島考古』

第3次調査花粉分析結果抜粋

・花粉群集の特徴

トレンチ19の3m層, 3n層, 3o層, 3p層からは, 花粉がほとんど検出されなかった。なお, クリーシイ属-マデバシイ属は, 生態上からシイ類と考えられる。

・花粉分析から推定される植生と環境

江戸時代中期の堆積当時は, ヨモギ属やクワ科-イラクサ科などが生育する比較的乾燥した環境であり, 周囲にはシイ類, ナラ類, カシ類, モチノキ属などの樹木が生育していたものと推定される。花粉がほとんど検出されない原因として, 乾燥した堆積環境によって花粉が分解したことが考えられる。

主 な 関 連 事 項

- ①天正15(1587)年 島津氏豊臣秀吉に敗れる。秀吉義久に薩摩国, 義弘に大隅国を安堵
- ②文禄元(1592)年 文禄の役, 義弘出兵
- ③文禄3(1594)年9月 石田三成三州検地始まる
- ④文禄4(1595)年6月29日 秀吉朱印状で義弘に薩隅日55万石を与える(旧記雑録後編2 1544)
- ⑤文禄4(1595)年6月29日 秀吉全家臣に所替を命ずる(旧記雑録後編2 1544), 義久に対し鹿児島内城から大隅へ, 義弘には栗野から鹿児島内城に移るよう命ずる(旧記雑録後編2 1569, 1632)。7月20日義久は内城を出る覚悟をする(旧記雑録後編2 1569)。義久11月12日に大隅浜之市の近くに「屋敷」を構えて年内に移ることにした(旧記雑録後編2 1629)。義久10月に京都から鹿児島に帰り, その後富隈に新しく「宅地」を占って移った(旧記雑録後編2 1607)。義弘は大隅帖佐を「中宿」として12月3日までに移ることにした(旧記雑録後編2 1599, 1632)
- ⑤文禄5(1596)年7月10日 関白近衛信尹立ち寄り(三藐院記)
- ⑥慶長2(1597)年 慶長の役, 義弘出兵
- ⑦慶長3(1598)年2月 家督を家久に譲る。8月豊臣秀吉没
- ⑧慶長4(1599)年3月 庄内の乱
- ⑨慶長5(1600)年9月 関ヶ原の戦い
- ⑩慶長7(1602)年4月 徳川家康義弘
- ⑪慶長9(1604)年 義久国分市の舞
- ⑫慶長10(1605)年 義弘帖佐より平
- ⑫慶長11(1606)年 義弘平松より加
- ⑬慶長14(1609)年3月 家久琉球へ
- ⑪慶長16(1611)年 義久没
- ⑭元和元(1615)年7月 一国一城令
- ⑭元和5(1619)年 義弘没

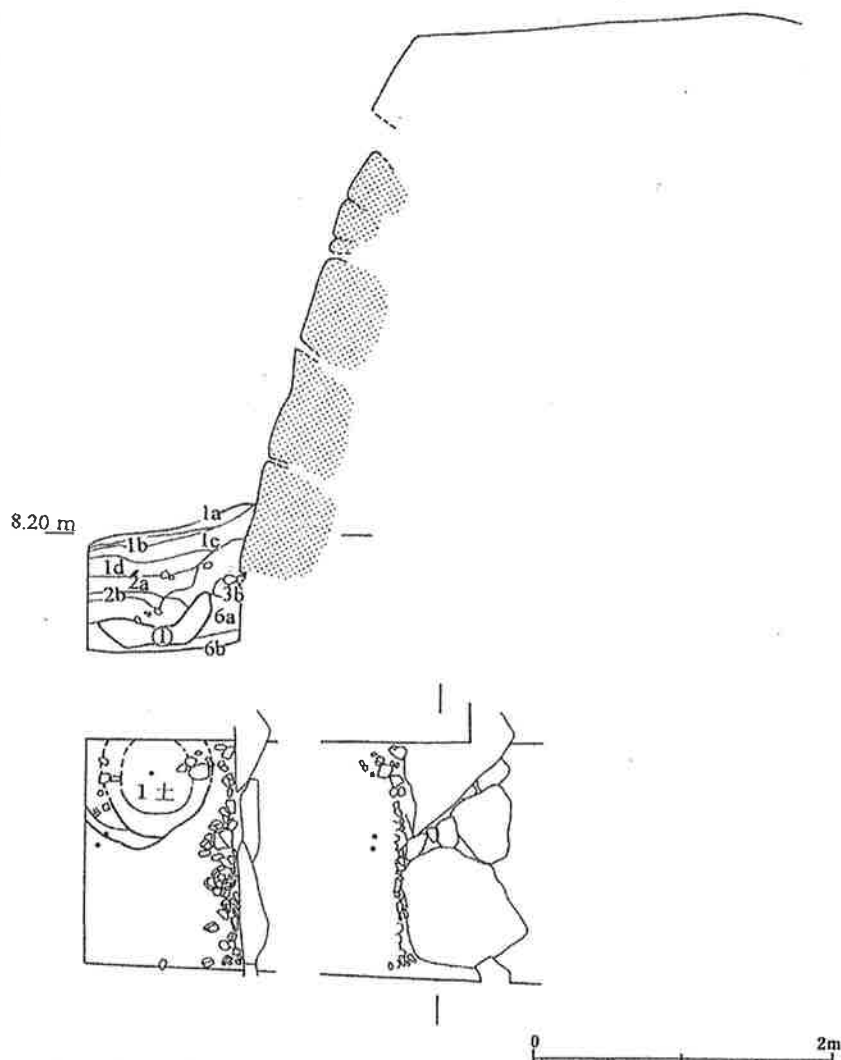


図13 トレンチ15

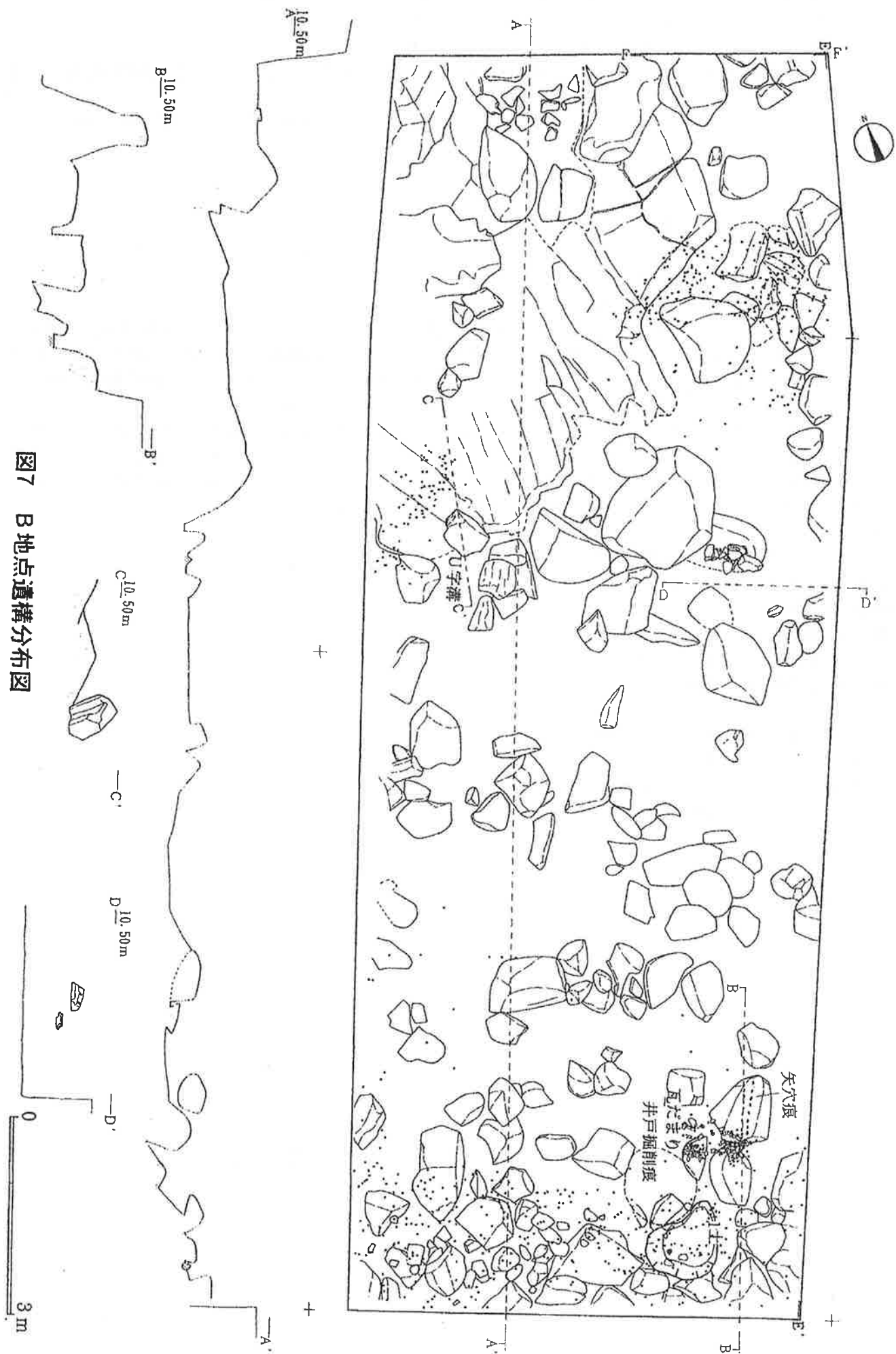


図7 B地点遺構分布図

12.00m

コンクリート

南

北
NHK

D面

トレンチ16

トレンチ17

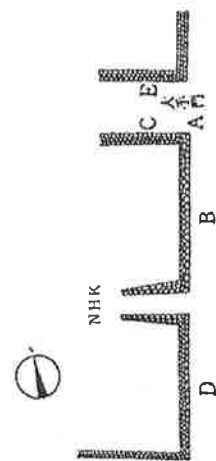
西 12.00m

東

大手門

E面

0 1 2m

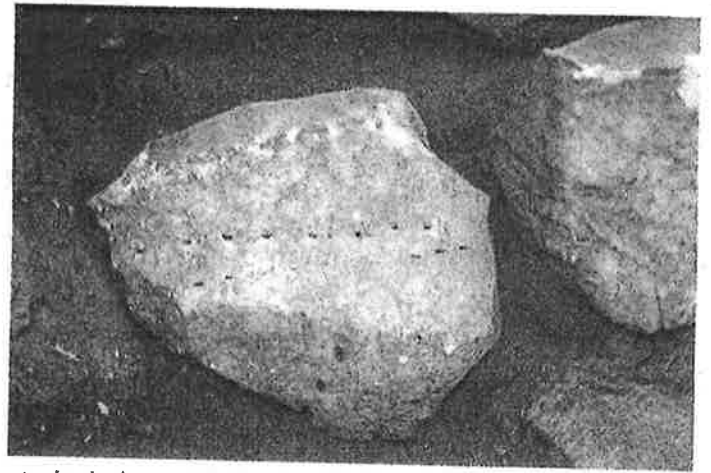


石垣測量面見取り図

図27 石垣測量図 (1)



▲ A地点礫検出状況 (第1次調査)



▲ 矢穴痕のある礫



▲ 出土遺物 (No.174)

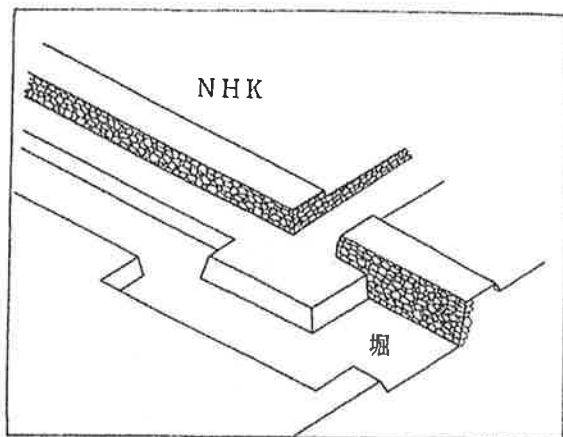
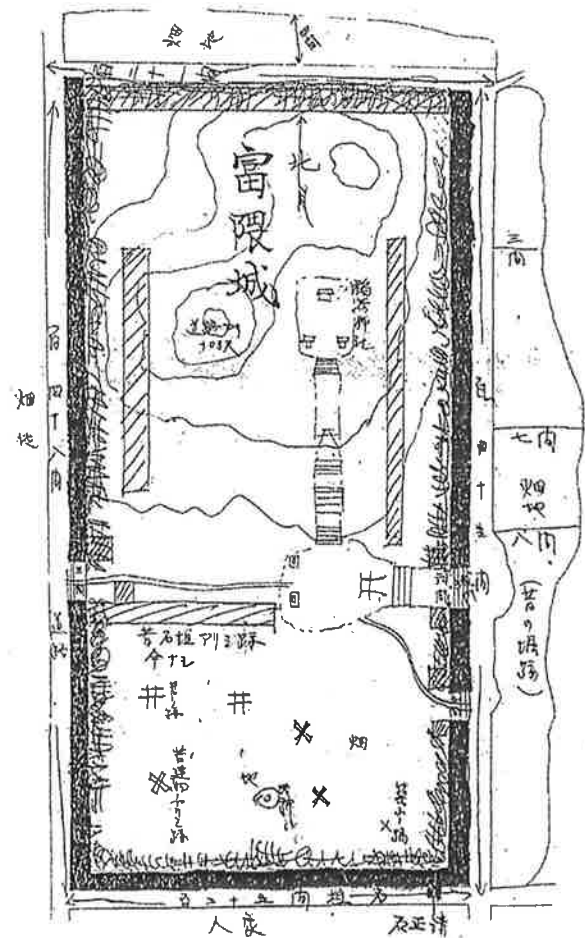


図29 大手門前 外枅形模式図

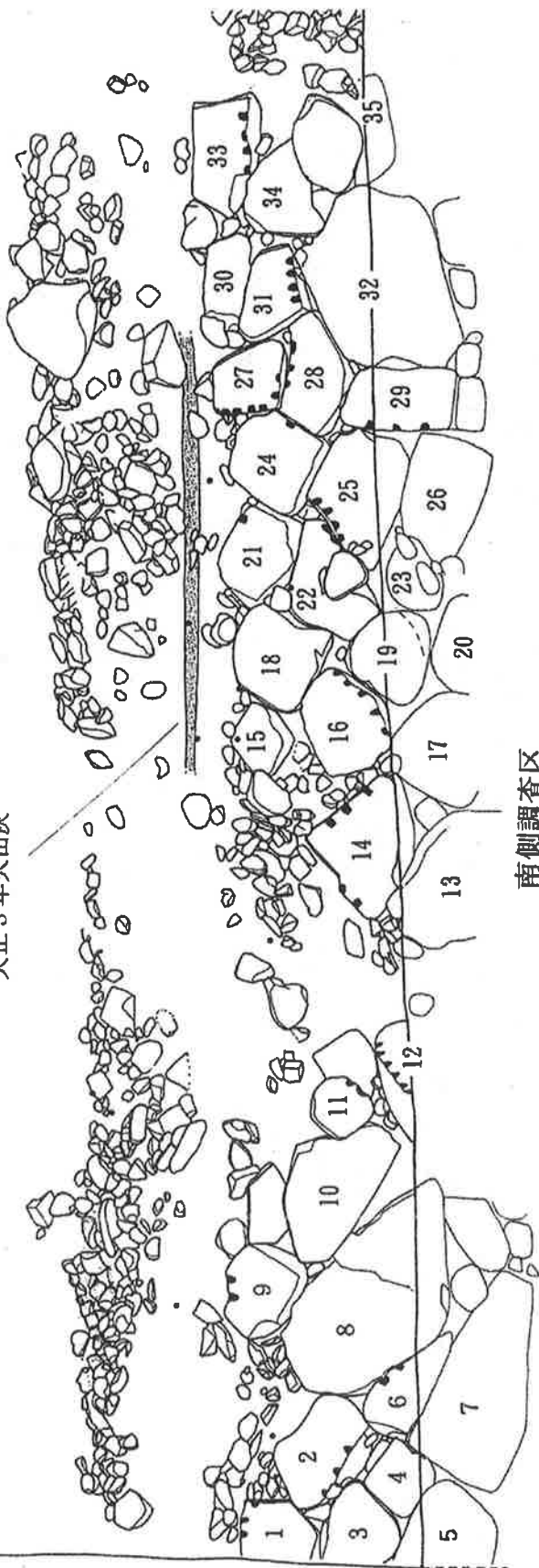


⑩ 図30 富隈城跡見取り図

(昭和14年頃松本空海氏撮影)

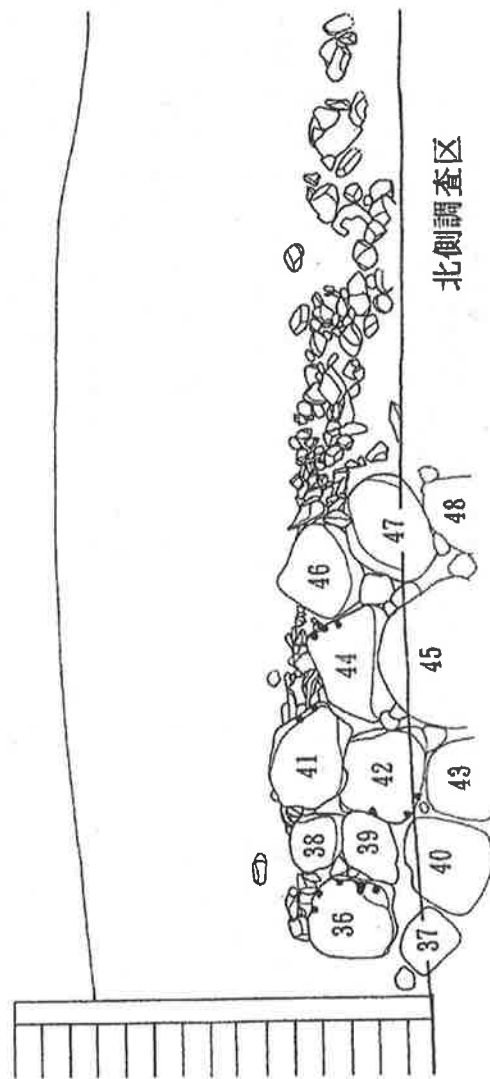
14.40 m

大正3年火山灰



南側調査区

14.40 m



北側調査区

第5図 D地点築石立面図

